

## 論文審査要旨及び担当者

報告番号 甲 乙 第 号 氏名 大串尚代

## 論文審査担当者

主査 慶應義塾大学文学部教授 巽 孝之  
文学研究科委員、Ph.D.

副査 筑波大学文芸言語学系助教授 今泉容子  
Ph.D.

副査 サンディエゴ州立大学人文学部教授  
シンダ・グレゴリー ( Sinda Gregory ) Ph.D.

**論文題目** “ Babylon Sisters: Captivity, Hybridity and Trans-Subjectivity in the American Romance of Lydia Maria Child ”

大串尚代君による博士号請求論文 “ Babylon Sisters: Captivity, Hybridity and Trans-Subjectivity in the American Romance of Lydia Maria Child ” は、19世紀前半のアメリカ文学において、創作のみならず女性解放運動においても奴隷廃止運動においても幅広く活躍し絶大な影響力を発揮しながら、文学史的には長く忘却されてきた女性口マンズ作家チャイルドの作品を丹念に再発掘し、1990年代以降の文化研究理論を応用しながら抜本的な再評価を試みた、学術的貢献度のきわめて高い画期的な論文である。全体は、序論と結論を含め、7つのセクションに分割されている。

Introduction	Romance of the Wildest Kind
Chapter 1	The Rise of American Romance: Female Warriors in Captivity Narrative and <i>Hobomok</i>
Chapter 2	A Tale of Our New England Grandmother: <i>The Rebels</i> as a Witch Trial of Ageism
Chapter 3	The Death of a Beautiful Man: Gender Anxiety in <i>Philothea</i>
Chapter 4	Babylon Sisters: The Female Flaneur in <i>Letters from New-York</i>
Chapter 5	Dangerous Crossings: Race, Gender and Class in the Romances of Child, Twain and Chase-Riboud
Conclusion	Towards the Possibility of a Desert Romance: Trans-Nationality of the American Romance in Child, Stowe, Harper and Bowles
Notes	
Bibliography	

## 論文の概要

19世紀アメリカの女性作家 Lydia Maria Child は、異種混淆ロマンス *Hobomok* で文壇に登場したものの、その後は奴隷制解放運動家、女性解放運動家としての活動を中心に据えた。実際に 1980 年代以降再評価が高まったチャイルドは、ブルース・ミルズやウィリアム・オズボーンらの批評家によって、社会改革運動家としての評価が現在も定着している。しかしながら、異人種混淆の問題に生涯たずさわったチャイルドは、そのデビュー作がそうであったように、まず最初にロマンス作家として評価されてしかるべきではないか、というのが本論文の着目するところだ。

まず第 1 章の “ The Rise of American Romance: Female Warriors in Captivity Narrative and *Hobomok* ” は、アメリカ植民地時代から連綿と続く捕囚体験記 (captivity narrative) の伝統を、メアリ・ホワイト・ローランドソン以降連なる女性作家の自己形成の水脈として読み解く。19 世紀に入り書かれたチャイルドの歴史ロマンス *Hobomok* は、白人女性とインディアン男性による悲恋物語であるが、インディアン男性ホボモクとの間に子をなした女性主人公メアリ・コナントを、こうした捕囚体験記のヒロインと並列することで、メアリがただ「かわいそうなヒロイン」ではないことがわかる。それどころか、この物語を白人女性によるインディアン男性のレイプを綴った逆レイプ・ナラティブと読むことさえ可能にする。女性の自己形成がいかに人種と密接に絡み合っているかを解明し、女性による捕囚体験記をアメリカン・ロマンスの起源と結論づける。

第 2 章の “ A Tale of Our New England Grandmother: *The Rebels* as a Witch Trial of Ageism ” では、1825 年に発表された *The Rebels: Boston before the Revolution* を扱う。これは、題名が示すとおり独立戦争を扱った作品であり、出版当時の書評者たちも専ら歴史的な事実関係や 18 世紀末の社会的な背景の描写に感銘を受けていたように思われる。だが、この作品の端役を演じる老女モリーに注目するならば、この作品に年齢差別の問題 (ageism) と、年齢差別の根拠となる女性の生産性 (出産) という尺度とを見いだすことができる。

*The Rebels* では、独立前の混乱期を生き抜くアメリカの姿と、孤児のヒロイン、ルクレツィアが独立する姿が重なるかたちで描かれている。19 世紀の女性小説に娘が母親から独立する物語が多く書かれたことは、すでにマリアンヌ・ハーシュが指摘しているが、*The Rebels* では母親ではなく、祖母が登場し、ヒロインを翻弄する。この祖母が「魔女」と呼ばれ、社会からは阻害された女性であることに着目すると、「魔女」というカテゴリーに押し込まれた女性が、魔女狩りという名の「捕囚体験」を余儀なくされていることがわかる。

魔女として告発された女性に共通するのは、例外なく老女であるという点だ。ピューリタン社会にとって「女性として最も大切なこと」は生産性、つまり子供を産むことであり、子供を産まない女性、ないしは子供を産めない女性はすべて「異端者」だった。ここでチャイルドは魔女狩りをロマンス化することで、母親（母性）もまた幻想であること、つまりロマンスによって実在する属性をも超えることが可能になることを、魔女と母親をつなぐロマンスで示す。

第3章の“ The Death of a Beautiful Man: Gender Anxiety in *Philothea* ”は、1830年代に美女再生譚を数多く発表したエドガー・アラン・ポウにも絶賛されたチャイルドの *Philothea: A Romance* に、美女再生ならぬ美男再生が描かれていることに焦点を絞る。それは、ヒロインであるフィロシアの恋人パラルスが二度死に、二度生き返るという場面に顕著である。

古代ギリシャを舞台にした本書は、アテネの奴隷制度を批判することで、同時代のアメリカ南部の奴隷制を批判した作品とのみ解釈されることが多かったが、作品内にみられるオリエンタリズム、円環思想、普遍的統一など超絶主義思想からの影響と、当時の言説空間に鑑みると、この美男再生譚には当時「名誉男性」と目されたチャイルド本人の複雑なジェンダー観が読み取れよう。

たとえば、パラルスとフィロシアが外見も性格もあまりに類似していたことに注目するなら、彼らは作者チャイルド内部のジェンダーを表していると考えられる。*Philothea* 執筆時に「名誉男性」と褒め称えられ、奴隷解放運動家として夫であるデイヴィッドよりも高い評価を得たチャイルドの性差混乱が、この作品に反映されているのではなかろうか。チャイルドが「自由奔放な想像力を展開したロマンス」と呼んだこの作品は、明らかに彼女の性差混乱を映し出す。

第4章の“ *Babylon Sisters: The Female Flaneur in Letters from New-York* ”は、ニューヨークで新聞の編集長となったチャイルドが、その紙上で連載したスケッチ集 *Letters from New-York* に見られる都市観を探る。この作品でチャイルドは、当時爆発的に巨大化していったニューヨークという都市を、自分なりの感性に従って描いているが、ここで注目すべきは、彼女が大都市を巡る遊歩者（flaneur）だったという点だ。男性の空間である街の通りを歩く女性といったら売春婦に限られていた19世紀に、彼女は精力的に街の中へと入り込み、通りを歩き、その印象を堂々と綴って新聞に掲載したのである。

ではチャイルドはニューヨークという都市に何を発見したのか。彼女の筆になる記事は、ニューヨークを喜劇的空間、監獄的空間という混沌とした場所と捉え、混沌とした場所であるがゆえに女性が歩くにふさわしい空間だと主張する。彼女はマンハッタン島を表すのに「監獄」「地獄」「精神病院」といった表現を繰り返して使い、さらには街を歩いている人たちはすべて俳優のようで自分

もその喜劇の一部に過ぎないのではないかと述べて、都市の舞台性、虚構性を意識する。

さて、これまで論じた章から、チャイルドが捕囚とそこから生じる混淆・混沌を表現しつつ、性差や人種をはじめ、社会的に与えられた属性の限界を超えていったことが、しかもそれがロマンスという文学形式によって可能になったことが明らかになった。続く第5章の“Dangerous Crossings: Race, Gender and Class in the Romances of Child, Twain and Chase-Riboud”では、人種と性差が微妙に食い違う三人の作家を合わせて考察することで、チャイルド以降のロマンス作品が、ロマンスと混淆主体の問題がもはや切り離せない水準にまで至ったことを論じる。混血奴隷の子供と白人奴隷主の子供を入れ替える「民族異装 (passing)」のモチーフが、マーク・トウェインの *Pudd'nhead Wilson* (1894) で用いられていることはよく知られている。この作品を下敷きにして、ちょうど100年後の1994年にはバーバラ・チェイス＝リボウがトマス・ジェファソンと黒人女性奴隷サリー・ヘミングスとの間に生まれたとされる娘を主人公に据えた歴史改変小説 *The President's Daughter* を発表している。この三つのロマンスの間には、どのような関係があるのだろうか。

チャイルドの *A Romance of the Republic* では、白人と見まごうほどの肌の色をした姉妹、ローザとフローラが実は黒人の血の混じった奴隷であったことが判明するところから、物語が始まる。ローザの恋人フィッツジェラルドは、ローザと結婚したのちに彼女を解放すると約束するが、フィッツジェラルドには実は白人の妻がおり、子供までもうけていた。ローザは自分とフィッツジェラルドとの間に生まれた子供と、フィッツジェラルドの白人の子供を入れ替え、奴隷であるはずのローザの子供は「白人」として育つ。ロマンスというジャンルが内包する「混淆」の問題を考えるならば、チャイルドからトウェインを経てチェイス＝リボウに至る道筋は、疑いなくロマンス進化の道筋であろう。

以上の各章において、混淆という主題とロマンスという形式の組み合わせが、いかにアメリカン・ロマンスを形成してきたかを再確認した著者は、最終章となる結論部 “Towards the Possibility of a Desert Romance: Trans-Nationality of the American Romance in Child, Stowe, Harper and Bowles” において、このジャンルが20世紀に入り、異国を舞台にしたロマンスの系譜へ発展する可能性を考察する。黒人をアフリカに移住させる主題は、その是非をめぐって違いはあるものの、チャイルドをはじめハリエット・ピーチャー・ストウ、フランシス・ハーパーなど19世紀に書かれたロマンスに散見される。アメリカン・ロマンスが国境を越え、最終的にはポール・ボウルズの *The Sheltering Sky* (1948) で描かれるアフリカ版捕囚体験記 (African captivity narrative) へ発展する道筋を確認して、このアメリカン・ロマンス論は締めくくられる。

## 審査の要旨

以下、2001年2月24日(土)に行った口頭試問の質疑応答をもふまえて、審査委員会の所見を要約する。

大串君の博士号請求論文“*Babylon Sisters*”は、19世紀女性作家として一世を風靡しながらも、20世紀も末になってようやく再発掘が始まったりディア・マリア・チャイルドを中心に、彼女の伝記的背景はもちろんのことその全作品に精通したうえで、昨今のフェミニズム批評や新歴史主義批評、オリエンタリズム批評がもたらした多くの知見から斬新な再解釈を展開し、アメリカ人専門家の水準に迫るばかりか、いくつかの章では、それ以上の学術的収穫をおさめえた野心的な研究である。まずはこうした主題設定の評価に関して、審査員一同は意見の一致を見た。通常、こうした先端的方法論を用いる論考の場合、多様にして術学的な学術用語を無闇に頻用することが多いけれども、大串論文は、そのような陥穽からはみごとに免れており、すべての議論がいったん論者自身の言葉で十二分に咀嚼されたうえで進行する。議論を支える英文も、きわめてこなれたもので読みやすい。こうした形式的な点についても、審査員一同は例外なく好感を持ったことを、つまびらかにしておきたい。

大串論文が扱っているのは、この作家チャイルドの *Hobomok* (1824) から *A Romance of the Republic* (1867) におよぶすべてのフィクションおよびノンフィクションであり、その論旨の中核には、チャイルド文学が基本的にロマンスにほかならないという前提がある。チャイルドを社会改革者とする批評家たちは、作品を社会改革思想の具現化と考えた上で分析を展開しているが、人種、ジェンダー、セクシュアリティ、年齢問題、社会的階級などの問題が作品内で複雑に絡み、ロマンスというジャンルの中に描き込まれたことの重要性には気づいていない。もちろん、アメリカ文学研究におけるロマンス論的アプローチについても、リチャード・チェイスやダニエル・ホフマンなどの先行研究があるものの、論者は果敢にもそうした方法論的伝統そのものへ挑戦するかのようになり、アメリカにおけるロマンス定義の走りとなった十九世紀作家 Nathaniel Hawthorne の *The House of the Seven Gables* (1851) 序文を徹底的に読み直すところから始める。このアメリカ文学史上あまりにも有名な序文は、ノヴェルとしての小説が現実を描くとしたらロマンスとしての小説は想像力を強調するという区分を施す。しかし大串君は、ロマンスが結果的に人間の心の真実からは目を背けることがないのに注目し、このジャンルが結果的に、現実的なものと想像力の双方に二重の忠誠を誓ってしまっているのではないかと、そしてまさにそのようにふたつの領域の境界を侵犯するロマンスの特質こそが、人種においても性差においても曖昧性と混淆性を呼び込みやすくなっているのでは

ないかと主張する。ロマンスはその性質上、じつは初めからハイブリッドな文学ジャンルであったというのが、本論文全体の骨子を成す。

こうした論旨をいちばん典型的に表しているのは、第 1 章 “The Rise of American Romance” であろう。ここでは、17 世紀植民地時代のインディアン捕囚体験記のジャンルの伝統が 19 世紀ロマンスのジャンルの勃興と巧みに接続される。捕囚体験記が宗教的な回心体験記 (conversion narrative) の形態を採りながらも、実は反面、女性の自己形成を促進させる役割をも担っていたことを明らかにし、それをアメリカの女性文学伝統の出発点と規定する。たしかにローランドソンの捕囚体験記には、そもそも神の前での自己滅却こそが美德とされたピューリタンであれば記さなかったであろう自己弁明が書き込まれていた。インディアンに身体も精神も「汚されて」はいないと書き記すローランドソンは、しかし、手記の中でインディアンと生活をするうちに女性としての自己に目覚めていく過程をも露呈している。こうしたインディアン化によって女性の自己形成が促進されていくことがより鮮明にわかるのは、ハンナ・ダスタンのエピソードであろう。彼女は自分を捉えたインディアンを斧で殺戮し、みごと脱走に成功する。彼女の逸話は 19 世紀にも語り継がれることになるが、ダスタン夫人が残した壮絶な体験談は、のちにホーソンら男性作家によって否定的に語り直される。それは彼女が、インディアン化したうえ、白人男性が規定する「女性」の範疇を超えてしまったが故の反応である。本章は、そのような捕囚体験記内部のフェミニニティを拡大することで、まさしく 17 世紀植民地における異種族間交流に材を採ったチャイルドの代表作 *Hobomok* に、新しい光を当てている。

論文全体で最も高く評価すべき一章があるとしたら、やはり表題作になっている第 4 章 “Babylon Sisters” であろう。チャイルドはここで、すでにマンハッタン島自体が監獄であるならば、女性が街を歩いていたとしても（つまり街娼として街を歩いているとしても）とがめられるいわれはないと考え、女性が街を歩くことの正当性を主張する。ニューヨークで街を歩く権利を獲得したチャイルドは、街を歩きながら都市の物語を街のあちこちに見いだす。それは土地の持つ物語であり、それをもとにしてチャイルドは想像の翼を羽ばたかせる。都市にロマンスを読み込んだチャイルドは、物語を持つ土地こそが都市になりうることを唱えた都市文学者の側面を持ち、ロマンスに都市空間を映す性質を付したのだ、と論者は説く。このようなチャイルドの手法は、たんに 19 世紀のアメリカ女性のための新しい空間を切り拓くにとどまらず、20 世紀にトム・ウルフラが報道記事的な客観性と極私的な想像力とを融合した 1960 年代ニュー・ジャーナリズムの手法に近接する。

また、第2章の“ A Tale of Our New England Grandmother ”や第3章の“ The Death of a Beautiful Man ”などでは、ジュリア・クリステヴァやギルバート&グーバー、それにキャサリン・ヘイルズらのフェミニズムおよびポスト・フェミニズム理論が活用されて、19世紀アメリカがいかに性差や人種の言説的準拠枠を構築してきたかが、あたらしく明快に示される。

このうち第2章では、祖母を魔女的に描きつつも、ルクレツィアが幸せな結婚はするものの、子宝に恵まれたかどうか物語中で明示されていない点が見逃せない。というのも、魔女である祖母に運命を翻弄されたルクレツィアは、自らも魔女（子供を産まない女性）として生きた可能性が出てくるからである。また第3章では逆に、フィロシアの恋人の青年パラルスの美しさが強調されるものの、彼女がアテネを追放されるときも、彼の方は何もできない男性ではない点が、鋭くえぐり取られる。パラルスはさらには疫病にかかり、意識も朦朧とした病人になってしまう。このように美しいだけで何もしない彼は、弱り果ていったんはその命を落とすが、呪医のまじないによって一命を取り留める。その後も健康とはいえないパラルスは、オリンピック競技を見て興奮したあまり、また絶命の危機を迎える。フィロシアの看病に身を任せるだけのパラルスは、なぜ生き返らなければならなかったのか—この問いかけは、当時の名うてのフェミニスト作家の作品を対象とするだけに、じつに興味深い性差混乱の主題を導き出し、そして論者はそれを非常に丁寧に跡づけてみせるのだ。

また、第5章の“ Dangerous Crossings ”では、チャイルドの *A Romance of the Republic* とトウェインの *Pudd'nhead Wilson* という同時代作品がいかに類似し相違しているかを分析し、そこで提起された問題系がいかに20世紀のチェイス=リボウによる *The President's Daughter* にまで発展しているかが精密に検討される。チャイルドは白人と黒人の差異をなくし、人種とは絶対的なカテゴリーではなく、曖昧なものであることを示し、トウェインは「人種(生まれ)」が「人格(育ち)」によって曖昧になっていく様子を暴き出した。20世紀の作家チェイス=リボウは、*The President's Daughter* においてこうしたカテゴリーの曖昧さをさらに押し進めた結果、人種、ジェンダーのみならず、近代家族制度、母性、セクシュアリティなどの本質性を疑い、どんなことでも“passing”(異装)できることを示す。いわゆる1850年の妥協がアメリカン・ロマンスに与えた影響がいまひとつ明確にされていなかったり、ダーウィンの『種の起原』(1859)が人種間雑婚の言説へ与えた影響がいまひとつ実証されていなかったりするくらいはあるものの、にもかかわらず本章の主題設定はあまりにも魅力的だ。チャイルドとトウェインの比較についてはMark Pattersonらの先行研究はあったものの、それを世紀を超えたアメリカ文学史観から読み直す試みは内外でも先例がないため、本章の学術的価値はきわめて高い。

そして、とりわけ結論部であるとともに独立した第 6 章として読むこともできる最終章は、チャイルドの応用したインディアン捕囚体験記の枠組がいかに 20 世紀モダニズム作家 Paul Bowles の *The Sheltering Sky* にまで連携し、そこにおけるアフリカ系捕囚体験記と連動しているかをみごとに解析していく。もちろん、植民地時代以来の捕囚体験記の伝統には、当時の三角貿易のさなかで白人が黒人の奴隷にされてしまう北アフリカ中心のバーバリ捕囚体験記も確実にからんでいたのだから、国籍離脱したかに見えるボウルズもまた奥深い部分でアメリカ文学の国民的伝統を換骨奪胎していたといういきさつを明かす論点は、あまりにも正しい。しかも、これまでのところ、David Trotter のような文学史家を除き、英米の研究者でこのような汎大西洋アメリカ文学の可能性を吟味した者がほとんどいないとなれば、大串君の視点は 19 世紀文学研究とともにアメリカ文学史研究そのものを、国際的にも大きく前進させるだろう。

もちろん、大串君が一貫して使用しているキー・コンセプトのいくつかが一たたとえば“Romance,” “Novel,” “sentimentality,” “Sensation Fiction,” “Captivity Narrative,” “hybridity” といった術語群が一彼女本人が確信している以上に定義不十分であるのは、指摘しておかねばならない。たとえば第 1 章は、「チャイルドがハイブリディティを探求したのは、まさにハイブリディティにふさわしい文学ジャンルを通してのことであった」という主張を貫いているが、しかしこの主張が成立するためには、まさにここで用いられているハイブリディティなりロマンスなりの傍証をあらかじめもう少し慎重に行っておくべきであった。また、中世以来のロマンス伝統を着実にふまえたうえで、アメリカ特有のロマンスとは何か、それはアメリカ以外の諸国におけるロマンスといかに異なるのかについても、省察が望まれる。さらに、これは論文全体の構成に関することだが、章から章へ移行する際の動機付けをもう少し補強した上で、議論の必然的な流れをもう少し効果的に演出しておくべきだったろう。

さらに、図版の引用についても指摘するならば、第 2 章の 40 ページ、Figure 2 において、女性としてのアメリカが男性としてのイギリス人医師によって「お茶」をむりやり飲まされており、それによって当時のジェンダー・ポリティクスが例証されているわけだが、それならば、イギリスもまたこの構図の背後ではブリタニアという名の女性として表象されていることの意味も明らかにしておいた方が、性差の複合性をよりいっそう強調することができたと思われる。

とはいえ、以上のようにさまざまな本質的議論を触発するということは、とりもなおさず、本論文が多様な可能性および将来性を秘めていることを意味する。現段階においても、国際的水準に達している部分が含まれていることは、すでにくりかえし言明したとおりである。かくして審査委員会一同は、大串君の博士号請求論文を、学位にふさわしいものと判断する。